「今日のソ連邦」一九八五年第19号付録

「今日のソ連邦」昭和60年10月1日号（第28巻・第19号・通巻六四〇号）付録

米国のタイム誌に対する M・S・ゴルバチョフの回答

米国のタイム誌はM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長に対し、一連の質問に答え、H・グルンワルド同誌編集主幹、R・ケイブ編集長、R・ダンカン副編集長、J・ジャクソン・モスクワ支局長と会見してほしいと要請してきた。会見は8月28日に行われた。以下はM・S・ゴルバチョフの回答（書面）と彼の米国記者との会見内容の全文である。

問い　ソ米関係の現状をどう見るか。いまこの関係を決定している主要な出来事は？

答え　この質問が2カ月ほど前に出されていたら、私はこう言っただろう。両国関係の現状はやや好転し、前向きの変化へのなにがしかの期待が現れている、と。

全く残念なことだが、今日ではもうこのように言うことはできない。真実を直視する必要がある。ジュネーブで交渉が始まり、首脳会談の合意が成立したにもかかわらず、両国間の関係は悪化し続けており、軍拡競争は激化し、戦争の脅威は減っていない。これはどういうことなのか、なぜこういう事態が進展しているのか？私と同僚たちは自分自身の活動に、――国内活動ばかりでなく対外活動にも、十分にきびしく自己批判的な態度をとっている。そしてわれわれは何度となくこう自問している。もしかしたらこれは、なんらかの形でわれわれの行動と結びついているのではなかろうか、と。

だがこの場合、われわれはどういう点で自らを責めることができようか？　現下の責任重大な情勢の中でモスクワは米国に関する発言で自制を保つよう努め、反米キャンペーンに訴えておらず、ましてや貴国に対する憎悪をあおるようなことはやっていないではないか。政治的先鋭化の時点においてさえ、米国民に対するソ連人の伝統的な尊敬の念をうちこわさないようにすることが、非常に重要だとわれわれは考えている。私が判断しうる限りでは、この感情は多くの点で相互的なものだ。

軍縮交渉が再開され、6年の中断の後初めての首脳会談の準備が進められているという条件下で、悪循環を断ち切り、軍備制限プロセスの行き詰まりを打開する方法を粘り強く探し求めているのは、いったい悪いことだろうか？ほかならぬそうした目的をめざしているのは、たとえば核爆発に対するわれわれのモラトリアム、それに加わり、核実験完全禁止交渉を再開するようにという米国への提案、および宇宙での平和協力と軍拡競争防止に関する提案である。現在の複雑な状況からの出口を一緒にみつける必要があるとわれわれは確信している。

そして、われわれの提案が米国の責任ある活動家たちになぜあれほど露骨な不満を引き起こしたのか、理解できない。それらを純然たる宣伝であって、それ以上のものではないとみせかける試みがなされたのは周知のことだ。

ほんの少しでも問題の本質を知っている人なら、われわれの提案の背後にあるのは最も真剣な意図であって、世論に影響を与えようとする試みとやらではないことを、たやすく見てとるだろう。核軍備制限のあらゆる現実的な努力は、実験の禁止から始まった。この道での最初の大きな一歩となった一九六三年の条約〔部分核停条約〕を思い起こしていただきたい。核実験の完全停止は、質的にみて最も危険な方向で核軍拡競争をおしとどめるだろう。そればかりでなく、核兵器不拡散体制の維持と強化への重要な寄与となるだろう。

われわれがやっているすべてのことをもっぱら宣伝にすぎないと見るのなら、なぜ“目には目、歯には歯”の原則でそれにこたえないのか？　われわれは核爆発を停止した。あなたが

たアメリカ人もこれに対抗して同じことをやればよいではないか。それに加えて、たとえば新型戦略ミサイルの一つの開発を中止するなど、もう一つの宣伝上の打撃をわれわれに加えればよいではないか。そうすれば、われわれも同様の〝宣伝〟でこれにこたえるだろう。これに類したことをその先も続ければよい。ひとつうかがいたいが、このような〝宣伝〟での競争で誰が被害を受けるだろうか？　もちろん、これは軍備制限の包括的協定にとって代わることはできないが、このような協定への重要な一歩となることは疑いない。

残念なことに、米政府は別の道を進み始めた。われわれのモラトリアムにこたえて、米政府はこれみよがしに、あてつけがましく、急いで定例の核爆発を実施した。そして平和な宇宙に関するわれわれの提案に対しては、衛星攻撃兵器の最初の実戦テスト実施の決定でこたえた。しかもこれに加えて、定例のソ連に対する〝憎悪のキャンペーン〟を展開したのである。

これらすべてはどういう印象を生み出しているだろうか？　一方では、ワシントンにある種の困惑と自信のなさが見られる。これは、われわれのイニシアチブがソ連こそ〝悪の根源〟であり全般的な危険の源泉であるという主張をぶちこわしてしまうのではないかという不安のあらわれとしか説明できない。実際のところ、軍拡政策全体はこの主張の上に構築されているのだ。他方、平和の運命に対する責任感不足の印象を受ける。正直に言って、これはわれわれに改めてこういう質問をつきつけるものだ。そもそもこういう雰囲気の中で正常に事を運び、国家間の合理的な関係を構築することができるだろうか、と。

ソ米関係における主要なもの、決定的なものは何かというご質問だが、われわれが相互に相手を好ましく思うにせよ思わぬにせよ、われわれは生死をも共にしなければならないという争いがたい事実がそれだと思う。われわれが自分に対して答えなければならない肝心かなめの問いは、結局のところお互いに平和のうちに暮らす以外に道はないという点を認める用意がわれわれにあるのか、自らの思考と行動の様式を軍事的なものから平和的なものに作り直す用意があるのか、という問いである。貴国でよく言われているように、自らも生き、他人をも生かすのである。われわれはこれを平和共存と言っている。ソ連についていうなら、われわれはこの問いにイエスと答える。

問い　11月に予定されているレーガン大統領とのジュネーブ会談の結果をどう予想されるか？　米ソ両国は二国間の関係改善のためどのような具体的行動をとるべきか？

答え　この会談に同意した時点に比べて、われわれが今日、ジュネーブ会談の見通しを一層慎重に見ている理由については、実質上私はすでに前の質問への答えの中で述べた。その結果は現在すでに進行していることに多くの点で左右されるはずだからである。

恐らく誰しも同意するだろうが、会談の政治的雰囲気は前もってつくりあげられるものだ。大統領も、私も、自国内の世論と同盟諸国の世論の動向を無視することはできない。言い換えると、今日の行動が11月の会談の〝シナリオ〟をもかなりの程度決定する。

隠さずに申し上げるが、いま進行していることに失望し、不安を感じている。ワシントンの実地の政策から見ても、ホワイトハウスの高官たちの発言から見ても、そこで形成され始めていると思われるアプローチは、われわれの憂慮を呼ばずにはおかない。これはわれわれに攻撃をあびせ、われわれを追いつめ、過去にすでに一度ならず見られたように、軍拡競争の開始から中東での〝侵略〟にいたるまで、人権侵害からこともあろうに南アフリカ共和国での陰謀とやらにいたるまでのありとあらゆる重大な罪をわれわれに転嫁しようとするシナリオである。国家の政策というものではなくて、熱に浮かされた〝悪の勢力〟狩りのようなものである。

われわれは具体的、実務的に話し合う用意をもっている。自分の勘定書を出すこともできる。タイム誌の読者にはっきり申し上げておきたいが、核軍拡競争に対する米国の責任についても、世界のさまざまな地域での米国の行動についても、実質上テロリズムに従事している連中への支持についても、米国自体や米国と親しい多くの国での人権侵害についても、われわれは言うべきことをもっている。しかし、私は次のようなことを考える。このために首脳会談を計画する価値があったのだろうか、と。両国民も、すべての大陸の人々も、平和、安全で平穏な生活への希望をこの会談に結びつけているのだ。ののしりはよい仕事の役には立たないのだ。

これほど重要なこの会談に、私は別の見方をもっている。言うまでもなく、モスクワのわれわれは、ソ米をへだてる溝の深さを十分に認識

している。近年の米国の政治指導者たちの発言に接するにあたり、われわれは自分たちが同意できない発言、率直に言ってしばしばわれわれを憤激させる発言に注目せざるをえなかったけれども、それと同時に、それでもやはり接触点を、共通あるいは並行する利益のゾーンを見つけ出すことができるとの希望は失わなかった。このための基盤はある。たとえば、核戦争を遂行することはできないし、この戦争で勝つことはできないとか、米国は軍事的優位をめざしてはいないとかいった発言がそれである。要するに私は誠実な、先入見のない話し合い、核の奈落のふちから後戻りする道を探求する意図に貫かれた話し合いを期待し、もううんざりするほど聞かされた神話やきまり文句ではなく、現実の諸問題、われわれ両国の現実の利益、われわれの未来、世界共同体全体の未来を審議することを期待していたのである。

しかし、あらゆる点から判断して、相手側がいま準備しているのは、全くそういったことではない。いかにうまく相手をやっつけ、いかに余分の得点をかせぐかということだけを考えた政治的〝超剣闘士〟の格闘に類したものが準備されているようだ。しかも若干の発言の形や内容たるや驚きである。その一例が、マクファーレン氏のさきごろの〝レクチャー〟だ。この中には、ジュネーブでわれわれにあびせるつもりの〝非難の数々〟だけでなく、きたるべき交渉に対する、私に言わせればきわめて独自な解釈もそっくりそのまま盛りこまれている。交渉の前進はどんなに小さなものでも、もっぱらソ連の譲歩いかんにかかっている、というのだ。その譲歩は、軍備、地域的問題から、はてはわれわれの国内問題などあらゆる問題に及んでいる。

これがすべて真面目な発言だとすると、ワシントンはわれわれがこれまで話し合ってきた出来事とは明らかに違うものの準備を進めているのだ。首脳会談は、交渉、それも平等の基盤にもとづいた交渉のためのもので、どちらかの降伏文書の調印のためのものではない。われわれは米国に戦争でも個々の会戦でも負けたことはなく、勝負の借りも全くないのだからなおさらだ。同じことが米国側にもいえる。

もしこれがすべて真面目でないとすると、好戦的なハネ返り発言はなおさら不適当だ。必要もないのに腕力を誇示したり、騒々しい芝居を演じたり、国内の政治抗争のやり口を両核保有国の関係に移したりする必要がどこにあるだろう。そこでは力を誇示する言葉は無益で、危険だ。だが首脳会談までにはまだ時間があるので、それを建設的で有益なものにするために少なからぬことができるが、それは、あなたがたもおわかりのように、双方に左右される。

問い　ソ米関係の文脈の中でのＳＤＩの研究計画についてどう思うか？　このようなシステムの開発を禁止する相互協定は可能だと見るか？　ソ連はその場合どういった種類の査察なら同意するのか？　もしこのような協定を成立させることができないとすれば、軍備管理のその他の側面についてはどのように事態は進展すると見ているか？

答え　ワシントンの公式筋は、いわゆるＳＤＩ批判にこたえる際、ロシア人が〝スターウォーズ〟に反対するからだ、という論拠を好んで引き合いに出す。彼らはこれをとどめの一撃となる論拠と思っているのかも知れない。ロシア人が反対している以上、それは結構な、正しい計画だというわけだ。しかし核時代にあってそのような論理から出発すれば、われわれの行く手にはきわめて暗たんたる未来が待ち構えている。

われわれは、多くのアメリカ人もそうだといいのだが、問題を違った風にとらえている。両方ともが損をするケースもあると考えているのだ。それは核戦争であり、軍拡競争であり、国際的緊張である。したがって、両方ともが得をするケースもある。それが平和と協力であり、平等の安全、核破局への恐怖の一掃である。

〝スターウォーズ〟計画の評価については、われわれは、ＳＤＩが核攻撃手段に対する非脆弱性を保障し、それによって核兵器の廃絶をもたらすなどという主張を真面目に受けとることはできない。われわれの見解や、私の知る限りでは、あなたがたの国の多くの専門家の意見では、それは実現不可能な幻想、むなしい夢だ。専門家の評価によれば、ＳＤＩは限られた能力をもつ対ミサイル防衛システムとして、もっとずっとささやかな規模でなら実現可能だというが、このずっとささやかな規模においてさえ、それは非常に危険だ。このプロジェクトは、間違いなくすべての方向で軍拡競争を激化させ、つまりは、戦争の脅威を高めることになる。したがってこのプロジェクトは、われわれにとっても、あなたがたにとっても、一般にすべての人にとっても好ましくない。

われわれは、ＳＤＩ研究計画と呼ばれている

ものも同じ観点から見ている。まず第一に、われわれはこれを研究計画とはみなしていない。われわれの見解では、これは一九七二年の相応の条約によって禁止されている新しいＡＢＭシステムの開発の第１期プロジェクトだ。規模だけをとってみても、向こう数年間で七〇〇億ドルを支出しようと考えているが、純粋な研究費だとすると、これは考えられない額で、米国の科学者もこの点を指摘している。というのもこの費用は、現在の価格に換算して核兵器開発計画の〝マンハッタン・プロジェクト〟の総額の4倍余り、人間の月面着陸にいたる丸10年間の宇宙開発を見込んだ〝アポロ〟計画の2倍余りに相当するからだ。これが純粋な研究計画では決してないことは、予定されている攻撃宇宙兵器システムの実験を含めた別の事実も物語っている。

だからこそＳＤＩ計画全体も、いわゆるその研究部分も、軍拡競争の新たな、より危険なラウンドにほかならず、それは必然的にソ米関係の新たな緊迫化につながる。そういうことが起こらないようにするために、1月にソ連外相と米国務長官が合意したように、宇宙での軍拡競争を防止しなければならない。この点での協定は可能だし、協定を検証できると、われわれは確信している。ここで、われわれがアメリカ人を信用している度合いは、アメリカ人がわれわれを信用している度合い以上のものではないということ、だからアメリカ人と同様に、各協定が確実な検証に付されることに関心を寄せていることを指摘しておかなければならない。

このような協定が成立しなければ、核軍備制限・削減協定も達成できないであろう。防衛軍備と攻撃軍備の間の相関関係は証明の必要もないほど明白だ。というわけで、宇宙兵器についての米国の現在の立場が最終的なものであるなら、ジュネーブ交渉は、はっきり言って、何の意味もなくなる。

問い　書記長就任以来、ソ連経済の状態を改善するためにいくつかの措置を講じてこられたが、これから予定しておられる今後の措置についてお話しいただけないだろうか？ソ連経済の主要問題は何だとお考えか？ 世界経済のどのような変化がソ連に有利に働くことができるだろうか？

答え　歴史から始めよう。われわれに一切関係なく起こった問題がある。ソビエト政権は、過去の体制から重い遺産を引きついだ。後れた経済、強力な封建的遺制、幾百万大衆の文盲がそれだ。

これに、国のかなりの部分を戦場とし、国民の労働で作られたものの多くを焼きつくし破壊した二つの破壊的戦争をつけ加えてほしい。とりかえしのつかない犠牲が出た。大祖国戦争の期間中に二〇〇〇万人が命を失い、何百万もの人が負傷し、不具になった。あの時から40年が過ぎたが、わが国の国民の記憶には、なめた苦しみの苦い思い出のページや受けた損失の重さが残っているのだ。人々の心の傷や大地の傷跡をいやすために、ソ連国民は平和を、平和だけを必要としてきた。

西側では、ソ連がファシズムの侵略によって破壊されたものを復興するためには、五〇－一〇〇年かかるだろうと再三書かれた。ソ連人は、一見不可能なことをなしとげ、きわめて短い期間で国民経済を復興した。しかし戦争と復興期にわれわれは革命後の期間の20年以上とはいかないまでも、ほぼ20年近く取られたという事実は動かせない。

複雑な条件のもとでわれわれは、われわれの制度の力を利用しつつ、ソ連を世界の経済大国に変えることができた。ここに社会主義の力と大きな可能性が現れた。

と同時に、われわれの欠陥や手落ちと結びついた別の次元の困難もある。われわれはこれを隠さずに述べている。いつもよく働いているわけではないし、現代の経済が要求し、われわれの大きな可能性——原料資源と高い資格を持った労働力資源、高度に発展した科学、とくに基礎科学、いまわれわれが感じている人々の支持、よりよく、より質が高く効率的に働こうとする人々の用意と希望——を生かすように経済を運営するすべをまだ学んでいない。

時代は、事態の決定的な改善を切実に求めている。社会・経済発展の促進構想もそこから生まれた。われわれにとって今日、これはきわめて重要な、最優先課題である。全面的な審議の後、それを解決する道が定められた。われわれは投資の利用を改善し、機械、電機、エレクトロニクス、エネルギー産業、運輸といった重要な部門の発展を優先させることを見込んでいる。農工コンプレクス部門、とくに農産物の加工と保管も依然として注意の中心にある。全体としてわれわれは、良質の食料品に対する需要をもっと完全に充足させるために必要なことすべてを行っていく。

国民経済の活動の改善は、経済の戦略的な方向での集中化の一層の強化——経済発展の利益に各部門、各地域、経営の個々の環をもっと厳格に従属させることを求めよう。しかし、同時にわれわれは、管理における民主主義的原則の強化、公団、企業、コルホーズとソフホーズの自主性の拡大、現場での自主管理の発展、イニシアチブや進取の精神——言うまでもなく、社会に害を与えるのではなく社会のためになるもの——の奨励の道にも沿って進んでいる。

要するに、われわれは最も合理的な経済運営の方法を探しているのである。大がかりな経済実験が行われているが、その趣旨は科学技術進歩のテンポを決定的に速め、すべての資源の利用を改善できるもっと有効な経営メカニズムの創設にある。われわれは、物質的、精神的刺激のすべてのテコや、利潤、価格形成、クレジット、独立採算制といった道具をこの課題の解決に役立てるよう努めている。これがすなわち、管理と計画化の全体系の抜本的改善のためのわれわれの活動の本質である。

と同時に、われわれは経済発展を速めるこれ以外の余力も動員している。規律と秩序を強化し、労働者から閣僚にいたるまでのすべての人々に対する要求を高め、無責任な態度や官僚主義と闘い、労働倫理を教育し、社会生活全体における社会的公正を強化することがそれである。

このように、われわれも多くの経済問題をかかえているが、ついでに言えばこれはどこの国にも見られることなのである。われわれは自分の問題を理解しており、自分の社会制度、自国の可能性を確信している。最近、私はさまざまな地区を訪れ、多くの人々——労働者や農民、技術者や学者と会う機会を得た。そこで感じた特徴的なことは、変革の必要性、活動を断固として改善する必要性が国民によって支持されているだけでなく、国民の要求、時代の真の要求となっていることであった。

強調しておきたいのだが、最近われわれが経済に注意を向けているのは、金属、石油、セメント、工作機械その他の製品の生産で新記録を出そうとしているからではない。肝心なのは、人々の生活を改善することなのである。われわれにはこれ以上に高い目的は存在しない。今年中だけをとっても、保健、科学分野の一連のカテゴリーの働き手、技術要員の賃金の引き上げ、大部分の年金生活者の物質的状態の改善、果樹園を造成し、あなたがたが言うところの〝セカンド・ハウス〟を建設するための毎年約一〇〇万区画の土地の無償供与に関する決定が採択された。このほかの多くの措置も計画されている。それらの規模が経済の成功にかかっていることは、当然である。最近、ここでは前向きの変化が目立っている。工業の成長率と労働生産性が高まった。

世界経済のどのような変化がソ連に有利となりうるか、とのご質問だが、これは経済というよりはむしろ政治の問題だけれども、なによりもまず軍拡競争の停止である。われわれは、いま防衛に向けられているすべての資金を民間の平和的目的に使う方を選びたい。あなたがたの米国でも、いま兵器生産に食いつくされているカネには別の使い道があるものと、私は理解している。赤字予算や国の債務から生じる問題についてはいまさら言うまでもない。他の諸国の問題についても考えることが必要だ。われわれは軍拡競争の停止を主張するに当たり、幾億もの人々が飢え、最も必要なものを奪われている時、幾千億もの資金を人間を皆殺しにする手段の開発に投じることは不道徳であるという点からも出発している。われわれはみな、こうした現状を無視する権利をもたないのである。

世界経済そのものはどうかと言えば、全般的な経済情勢および通貨・金融情勢の安定化、債務問題の公正な解決、新しい経済秩序への前進はソ連のためになるものとわれわれは見ており、また私が思うにそれは他の諸国のためにもなるものである。そして、もちろん、世界貿易の発展のための差別的な制限と他のすべての障害の排除、われわれとわれわれの友邦、同盟諸国がその中でもっと積極的な役割を果たそうとしている国際分業の一層の深化もそうだ。このような変化は全世界のすべての国民のためになるだろう。たとえば、ソ連と米国との間の広範な貿易・経済関係の確立は、貴国に数十万人分の職場を余分につくり出すことに役立つはずだ。

問い　ソ連は米国で開発された最新のテクノロジーをもっと多く手に入れようとしているのか、ソ連は先端技術をどの程度必要としているのか、それは主にどんな目的のためか？ もし米国がこのような技術へのこれ以上のアクセスを保障しなければ、ソ連はそれを入手するために誰に頼るのか？

答え　あなたの質問の出し方そのものには、いろいろと考えさせられることが多い。実際の

ところ、いま先端技術を手に入れようとしない者があろうか？　米国をも含むすべての国がそれを手に入れようとしている。なによりもまず米国だとさえ言える。私が言っているのは、ライセンスやハイテク製品の適法な購入あるいは不法な産業スパイのことだけではない。米国は独自のやり方をも実行している。たとえば、西欧だけでなく発展途上諸国からも〝頭脳を流入〟させている。その子会社を通して他の諸国の科学技術の成果を入手している多国籍企業の活動を見てもらいたい。いまやいわゆる〝スターウォーズ〟研究計画も同じ目的に利用されようとしている。

　ソ連はどうかと言えば、ソ連は、外国の科学技術の達成を比較にならないほどささやかな規模で利用している。とはいえ、われわれは国際分業への参加を拡大し、科学技術協力を発展させることを望んでいることを一度も隠したことはなかった。受益者として、こちらから出すべきものを持たずにこの〝市場〟に臨んでいるわけではないのだから、なおさらのことだ。

　ソ連が米国のテクノロジーへの渇望にさいなまれているとかいう説の提唱者たちは、今日のわが国がどういう国なのかを忘れている。わが国は革命後、テクノロジーの自立をかちとり、すでにずっと前に科学技術大国となった。そのおかげでわれわれは、第2次世界大戦を持ちこたえ、最初に宇宙に進出し、宇宙研究を広範に展開し、しっかりした防衛を確保し、全体として順調に国の生産力を発展させることができた。ところで米国の論拠の中の次のような矛盾点はどう理解すればいいのだろうか？　軍事予算の引き上げを根拠づける時には、米国ではテクノロジー分野におけるソ連の信じがたいほどの成果ばかりがうんぬんされる。禁止措置を根拠づけたい時には、わが国をまるで山奥の後れた村のように描き出し、それと貿易をする、ましてや協力し合うというのは、自国の〝国家的安全〟をぶちこわすも同然だという。ここではいったいどこに真相があるのか？　いったいどちらを信じればいいのか？

　われわれは、わが国のあれこれの製品の科学技術水準に満足していないことを公然と口にしている。しかしわれわれは、米国からソ連への〝テクノロジーの注入〟によってではなく、最先端の構想や発見、新機軸のソ連科学からソ連工業、農業への〝注入〟によって、自国の科学技術力のより巧みな利用によって科学技術進歩の促進を達成しようと考えている。ここにわれわれの計画とプログラムの重点がある。しかしそのさい、言うまでもなく、われわれは、相互性の基盤の上に築かれる米国を含む他の国々との科学技術協力が与えてくれる補足的な利益を拒むつもりはない。

　そうした協力は、七〇年代には核エネルギーを含むエネルギー産業、化学、宇宙研究、心臓学、腫瘍学その他の分野でかなり広範な発展をみた。利益が相互的なものだったことは米国の学者たちも知っている。いま協力は無に帰している。われわれはそれを遺憾には思うが、この状況に耐えていけるとはっきり申し上げることができる。それはわれわれ自身が第一級の科学をもっているからでもあるし、科学技術の成果を米国が独占しているわけでは決してないからでもある。

　米国のほうもそのことを理解しているので、ハイテク製品をわれわれと取り引きしないよう同盟諸国にますます強く圧力をかけている。しかも若干の種類のそうした製品を米国はやはり〝国家的安全〟を口実に西欧に持ち出すことも禁止し、その代表者たちが米国の試験所や学術シンポジウムへ立ち入るのをますます頻繁に拒んでいる。

　言うまでもなく、それによってわれわれに打撃を与えたがっているのだ。しかしそれだけではない、米国の同盟諸国の科学技術進歩にブレーキをかけ、それによって世界市場での競争相手の地歩を掘りくずそうとして、それらの国と米国との競争の中でも〝ソ連の脅威〟うんぬんのおどし文句がますます広範に利用されている。それらのもくろみはますます明白になっている。しかし、他の国々がテクノロジーを吸い上げられ、乏しいあてがい扶持で身を支える不平等なパートナーの立場に甘んじていくとは思わない。概してこれは、先見の明のない、見通しのないやり方だ。

　しかし私は、われわれの会話を否定的な調子で終わらせたくない。巨大な科学技術力をもつ米国とソ連のような二国がこの分野で平等な基盤に立って協力し合えば、ソ米両国民ばかりでなく全世界がそこから利益を得ることは全く明らかだ。

　この機会を利用して、貴誌の読者のみなさんのご活躍と幸福、平和な未来を希望したい。ソ連指導部とソ連国民を代表して、すべての米国人に知ってもらわねばならぬ最も重要なこと—

—ソ連からは戦争は起こらない、われわれは決して戦争を始めないということをもう一度言わせてもらいたい。

☆　☆　☆

M・S・ゴルバチョフ　書面回答で取り上げた問題を正しく理解するために大きな意義を持つと思われる考えを幾つか述べておきたい。

　言っておかねばならないが、最近私あてにさまざまな国のマスメディアから発言やインタビューの申し込みがかなり多くあった。ではなぜほかならぬタイム誌の要請に応ずることにしたのか？

　あなたから受け取った質問に目を通したとき、質問そのものの文章の中に、現在のわれわれ両国の関係に対する一定の憂慮の念が表れているように感じた。われわれは米国の政界その他各界の代表の口からこのような不安をあまり聞いていない。私に出された質問のこうした性格は

—私がそれを正しく理解しているとすれば—

—非常に重要な要素であると思った。

　もう一つ、それに劣らぬ重要な理由がある。それは今日の世界情勢に対するわれわれの評価とかかわりがある。その情勢は複雑で緊迫しており、一触即発の危険さえあると言いたい。その上今の情勢はさらに悪化する傾向にある。ここでこの動きの諸原因について触れるつもりはない。あなたがたはこの点に関するわれわれの見解をよく知っておられる。私はむしろ、いまわれわれ全員がどういうところにいるか、どういう世界に暮らしているかという質問に答えたい。ここで私は情勢を劇的に見せようなどとは全く思っていないが、あなたがたに率直にお話ししたい。というのも、多くのことが双方の情勢評価にかかっているからである。米ソのような大国の指導者を問題にするとき、これら指導者の情勢分析や実際の政策には、自国民ならびに人類全体に対する巨大な責任感が貫いていなければならない、とわれわれは考えている。

　現代の現実は、科学技術の発展水準が全く新しい状況の発生、軍拡競争の全く新しい段階の開始を可能にしている点にある。私はあなたがたの質問に率直に答えるように努めてきたので、私の回答を定例の〝宣伝〟と受けとめないでいただきたい。というのも、今ですら米ソ両国はお互いの間で話し合いをし、相互に何らかの歩み寄りをするのが非常に困難だというのが事実だからだ。相互不信がそれほど大きいのだ。そしてもしも軍拡競争が新段階に突入し、科学技術の最新の成果がこの目的に実際に使われるようになれば、相手側より優位に立ったと考え、この優位を自らの行動の自由を確保し、致命的な一歩を踏みだすために利用しようという誘惑がどちらか一方に生まれはしないだろうか。非常に責任重大な段階にきているわけだ。

　両国関係が緊迫しているにもかかわらず、今日でも若干の制限が効力をもち続けている。双方に一定の安全を保障する軍事・戦略的パリティーの存在や、ＡＢＭ条約、事実上守られているＳＡＬＴⅡ条約、核兵器不拡散条約、部分的核実験禁止条約などである。これらの制限が存在し、作用を及ぼしている。とはいえ、周知のとおり、すでにそれらを掘りくずす試みがなされている。軍拡競争の一層の展開を阻むこれらの制限を撤回しようともくろむ勢力が活動している。

　これらすべての抑止ファクターがなくなれば、言うまでもなく、次々と新型兵器を開発する競争はかつてない勢いで展開されるだろう。なぜならこの面での一方のあらゆる措置には他方の対抗措置が伴うだろうからであり、毒をもって毒を制することにならざるを得ない。それが歴史の教訓であり、これを無視するわけにはいかない。

　こんなことをやっていたら、われわれはどういうところに行きつくのだろうか？

　時はたっていく、かなり迅速に行動しなければ汽車は出てしまうかもしれない、と言いたい。それが私がタイム誌の質問に答えることに同意した二つ目の動機だ。

　人はみな生きることを望み、誰も死にたいとは思っていない。だから政治的勇気をふるい起こし、展開中の恐ろしいプロセスを止める必要がある。軍拡競争を停止し、軍縮と関係の健全化に着手する必要がある。

　モスクワを訪れたオニール下院議長を団長とする米国議会代表団との会談で私がすでに語ったとおり、われわれはソ米関係の健全化を断固支持している。それがわが指導部の観点だ。われわれは現状から冷静な現実的結論を引き出している。われわれは情勢健全化、関係改善を呼びかけているだけでなく、全く具体的な諸提案を打ち出しており、しかもわれわれ自身その方向で現実的な措置をとっているというのが、争う余地のない事実だ。当然のことながら、その

さいわれわれは、米国側の相応の回答を期待している。

残念ながら、軍拡競争と相互不信の悪循環を断とうとするあらゆる試みに対してわれわれは、「ノー！ノー！ 宣伝だ！ 宣伝だ！」という否定的な答えしかきいていない。実際、真面目な政治家は相手に対してそういう振る舞いはみせないものだ。

それにもかかわらずわれわれはこう考えている。停止状態の宇宙非軍事化交渉や戦略兵器、中距離兵器交渉を動かすことをめざすわれわれの提案や、われわれの核爆発停止決定などを含め、ソ連の最近の諸措置に関してわれわれがワシントンから聞かされたことはすべて米国政府の最終決定ではない、と。われわれはそこに期待をかけている。

尊敬する皆さん、われわれの会話の中で、われわれが互いの目を見ながらここで話し合っているこの部分は最も重要なところだと私は考えている。現在の世界情勢とソ米関係の現状に対するわれわれの理解や、この情勢の中でどのように行動しなければならないかという点に関するわれわれの理解が、米国民にはっきり、きちんと伝えられることを、われわれは期待している。

われわれ両国は、本来、ことを対決にまでもっていくわけにはいかないのだ。ソ連国民も、米国民も、ほんとうにそう願っている。これを実際の政策の言葉で表現しなければならないし、軍拡競争を停止し、軍縮と取り組み、ソ米関係を正常なルートに引き入れなければならない。全くの話、二大国民間のこの関係をその歴史的役割にふさわしいものにすべき時である。なぜなら平和の運命、世界文明の運命はわれわれ両国の関係いかんにかかっているからだ。われわれはこの方向をめざして行動する用意がある。

情勢がとくに悪化している理由はほかにもある。われわれが入手している情報からおして、ワシントンの政治的雰囲気は日ましに熱せられており、驚いたり、憤慨したりしないわけにはいかないような意見が流されている。

ホワイトハウスと一部の米国政府スポークスマンは、軍拡抑制に関するソ連とのいかなる合意も、問題になりえないことをほのめかしている。彼らに言わせると、期待できる最大のことは、両国首脳が互いに会って知り合うことであり、近年中、またはなんと数十年先に審議するための議題をまとめることだという。たとえば、

2－3日前に発表された米国政府のスポークスマン、アーマコスト、タワーのインタビューの内容も、この精神に立脚しており、一言でいえば、軍拡競争の停止と宇宙の軍事化防止に関するソ米間の合意のいかなる可能性をもあらかじめ忌避するために全力が払われているのである。ワシントン筋は極めて率直にこう言明している。ソ連がどういう手を打とうと、米国は絶対に攻撃用宇宙兵器と衛星攻撃システムを開発するつもりだと。まさにこれこそ〝クギを打ち込み〟、そのあと誰かに歯でそのクギを引き抜かせようとするやり方だ。

それではどうすべきか？ この動きを止めなければならない。それはソ連の利益にもなるし、米国の利益にもなるだろう。

過去にすでに何回、ソ連をひざまずかせ、弁命に疲れさせようとする試みが行われてきたことだろう。しかしそれらは全部失敗に終わった。こうした試みは、今後も失敗するだろう。

われわれについて言えば、われわれは米国を〝悪の帝国〟などとは言わない。われわれは合衆国とは何か、米国民とは何か、世界における合衆国の役割はどういうものかを知っている。われわれは両国の関係の新しい、よりよい段階を求めている。しかし事が、私の言っている軍拡競争の質的な新段階にまで立ち至れば、そういう課題を解決することはたとえ全般的にそれが可能であろうと、ずっとむずかしくなろう。だからこそわれわれは、戦略核兵器についても、中距離兵器についても、宇宙の問題でも、われわれと真剣に話し合うよう、米国に呼びかけているのである。

さてどうやら一番肝心なことは言ったようだ。そこでこんどはタイム誌の質問に対する私の回答のサインしたテキストをあなたがたにお渡ししたい。あなたがたが筆者不明の回答を載せたと誰からも非難されないように（笑い）注意してほしいが、緑色の表紙だから革命の匂いさえしないはずだ！（笑い）

H・グルンワルド　ミスター書記長、われわれはここにきてインタビューができて幸せに思っている。あなたがこの回答文と関連したご自分の考えを伝えるために、われわれにこうも沢山の時間をさいて下さったことをとても喜んでいる。われわれもソ米関係の現状を心配している。それはわれわれだけではない。

あなたはここで、対ソ関係をうち壊そうと望んでいるワシントンの若干の人々のことを話さ

れた。だがレーガン大統領はソ連に敵意を抱いていないし、対ソ関係の改善に努め、貴国に対する軍事的優位を達成しようとはしていないと何度も言った。あなたはこれらの確言をそのまま受けいれられるか？ 全般的にレーガン大統領についてどういう印象をもっておられるか？

M・S・ゴルバチョフ　これについて私はすでに書面による回答の中である程度触れた。われわれは大統領の国連での演説を含む一九八三年、一九八四年の一連の肯定的な発言に注意を向けた。われわれは、核戦争は許されない、核戦争には勝者はいない、という大統領の発言に注目した。これは非常に重要である。われわれは米国はソ連に対する軍事的優位の達成をめざしていない、という大統領の言葉にも注目した。大統領の発言におけるこれらおよびその他の肯定的要素は、一緒に将来を考え、われわれの関係における現在の否定的な時期を克服する可能性を与えているものと思われる。われわれは互いに歩み寄るなら、まだ多くのことを修正できると考えている。だからわれわれは、ジュネーブで大統領と会うことに同意した。だからわれわれは、この会談に関連していまワシントンで言われていることに対して、このように敏感に反応しているのである。米国のある女流ジャーナリストが表現したように、米国の世論は、たとえジュネーブで合意されるのがバレエ団の交換だけだったとしても人々が拍手をするところまで誘導されようとしているのである。

レーガン大統領の周囲で右翼政治家その他が何と言おうとも、われわれは真面目だし、この会談に向けて真面目な提案を用意している。会談の肯定的な結果の可能性を信じていなければ、われわれはそれに応じないだろう。これがわれわれの立場だ。

大統領個人についての私の意見をもたずねられたが、私は大統領と会ったことがないので、人間としての彼について何か意見を言うのはむずかしい。だが政治的には、われわれは大統領が米国民によって選ばれたということから出発している。わが国民は米国民を尊敬しており、われわれは大統領と交渉する用意がある。

H・グルンワルド　宇宙軍備に関する質問を一つ出させてほしい。われわれの質問に対する書面での回答でも、われわれとの対談の中でも、あなたは、ソ連は三つの分野――戦略攻撃兵器、中距離核兵器、宇宙兵器の分野での合意の達成をめざしていると言われた。だがモスクワから届くコメントから判断すると、あなたがたは研究をはじめ、宇宙兵器に関するあらゆる活動の完全停止を主張することによって、この兵器の問題についての交渉のための余地を残していない、という印象を受ける。そこでお聞きしたいのだが、ソ連は宇宙兵器の問題に関する交渉を行う用意があるのだろうか？ というのも、あなたがた自身が、周知のように、この分野で広範な研究をやってきたし、いまもやっており、従って、交渉に基づいてこうした活動を完全に停止することはできない点を理解しているはずだからだ。何らかの一致した水準なり限度について取り決めることができるだけだ。

M・S・ゴルバチョフ　非常に原則的な質問だ。宇宙空間の軍事化は禁止できないだろう、宇宙での軍拡競争は防止できないだろう――というのではそもそも何も生まれない。これがわれわれの断固たる立場だ。そしてこれはわれわれの利益も米国の利益も考慮したわれわれの極めて責任ある評価に基づいている。われわれには交渉する用意がある。だが、宇宙兵器についての交渉でもなく、どの種の宇宙兵器を宇宙に配備できるかということについての交渉でもなく、宇宙での軍拡競争を許さないことについての交渉である。

ジュネーブでソ連は、研究活動も含む攻撃用宇宙兵器の開発、実験、展開の禁止について取り決めることを提案した。禁止がこの新しいクラスの兵器の発生のすべての段階に及ぶことが必要である。なぜなら、研究は宇宙兵器開発計画の一部だからである。だからわれわれが、これらの研究のために米国で数百億ドル支出されているのを見るとき、これらの計画の立案者の真の意図がどこにあるのか、これらの計画から生じる宇宙への兵器配備政策がどういうものになるか、われわれにはまったく明らかである。

研究活動とその禁止の必要性について語るにあたって、われわれはもちろん、基礎科学のことを念頭に置いているのではない。これらの研究は現在も行われているし、これからも行われるだろう。米国では国防総省の課題と契約に基づいて、しかも必ず模型、テストサンプルが出現するにちがいない段階、実験室を出て野外での仕上げと実験が実施されるにちがいない段階で行われている開発が問題になっているのである。要するにそれは、しかるべきシステムの設計と生産の次の段階に必要なことすべてが行われる段階である。米国がわれわれに、しかるべ

き禁止は監視できるのか、と問うなら、われわれはそうだ、できる、と答える。私がいま言った段階でなら、それぞれの国の技術手段を使った監視は可能だ。われわれは現在、宇宙から自動車のナンバーを識別することが可能なのだから、実験室を出た野外の実験を追跡することは、われわれにはもちろんできるだろう。そのさい肝心なのは、いわゆる研究のすでに初期の段階でこのプロセスを停止すれば、宇宙兵器開発のその後の諸段階に対するあらゆる関心が消失するだろう、という点である。そうなったら、だれが資金を無益に支出するだろうか?

だが他方、研究活動に数百億ドルが使われれば、もちろん、途中でやめようとはだれも思わないだろう。兵器が宇宙へ打ち上げられてしまえば、プロセスはそもそもコントロールの利かないものになり、すでに私が述べたように、われわれはその結果を予測もできないような段階に置かれるだろう。

そのさい、もう一方が居眠りをしていないだろうことは確信できよう。

SDIの純粋に研究的な性格についての論議は、根本では宇宙兵器システム開発の大々的プロセスを隠蔽するのが目的である。

米国が現在すでに衛星攻撃システムの第2世代の実験を計画していることは、重大な結果をはらんでいる。われわれはそれに対して相応に反応することを余儀なくされるだろう。というのも、事は本質的に、宇宙配備ABMシステムの若干のエレメントの実験にかかわることだからである。それに、われわれが宣言した核爆発のモラトリアムに米国も同調するようにとの当方の提案に対するワシントンの否定的態度も考慮せねばならない。

米国政府は、ABMレーザー・システムのための核放射ポンピングを開発するために核実験が必要だからという理由からも、核実験停止を拒否している。だがこれは未来の宇宙配備ABMシステムのエレメントではないか。この計画が全面的に展開されたらどうなるだろう?　その結果について米国は真剣に考えるべきだ。

恐らく、米国の誰かが、われわれを追い抜き、ソ連をおしつぶす可能性が出てきたと考えたのだろうが、これは幻想である。これは過去にも出来なかったし、現在も成功しない。回答を、しかも十分に対応する答えを、われわれは見いだすだろう。だがその時にはあらゆる交渉が葬られてしまうし、いつ再び交渉の席に戻れるかもわからない。あるいはこのような展望が米国の軍産複合体に都合がいいのかも知れないが、われわれはいずれにせよそのために一役買うつもりはない。

われわれの提案はソ連国民と米国民双方の利益に沿うものである。それがまさに、軍産複合体の代表者をなによりもいら立たせることとなのだ。米国には彼らは大勢いるし、政府の中にもいる。それはわれわれももちろん感じている。だがことわっておかねばならぬが、われわれの建設的な態度は大変息が長い。われわれはこれからも米国政府に別のアプローチを選択するよう呼びかけていくだろう。そうすれば戦略核兵器の分野でも中距離核手段の分野でも大きな可能性が開かれるだろうし、両国関係改善の真剣な過程のためや他の国際問題の解決のための道が開かれるであろう。

思い出すが、先日ドニエプロペトロフスクに行った時、一人の労働者がこうたずねた。——レーガン大統領が言っている″スターウォーズ″計画とは何なのか?　米国はわれわれをだますのではないか?　私はこう答えた。——心配しないでもらいたい。われわれはだまされはしない。だが、われわれの交渉相手が相互に受けいれ可能な解決を探す用意を示すならば、われわれもこれにあらゆる努力を傾注しよう、と。

われわれの態度は人間的で非利己的だと思う。それはソ連と米国、その他すべての国の国民の利益に完全に合致するものだ。

あなたがた米国人にはほかにカネの使い道がないのだろうか?　あなたがたにも解決を要する問題があるのをわれわれは知っている。あるいは自分自身の問題よりはよく知らないかも知れないが、それでも知っている。

R・ケイブ　二つの質問をしたい。あなたの言葉から私は、最近の数週間の米国の声明や行動に関連した若干の事件に対する懸念を感じた。それは特に衛星攻撃システムの近々予定されている実験に関する声明や、さらにまたモスクワで米国人に対して振りまかれたとかいわれるきわめて奇妙な化学物質の話のことだ。恐らくこの二つの事件はきたるべきソ米首脳会談への精力的な準備という観点からは有益とは言えないだろう。この二つの事件はあなたを驚かせただろうか、またこれは首脳会談への準備に深刻な痛手をもたらしただろうか?

M・S・ゴルバチョフ　ジュネーブでの首脳会談の準備に関しては、あなたがたに断言できるが、われわれは真剣に準備に取り組んでいるし、この会談に大きな意義を与え、真剣な期待を寄せている。確かに、ワシントンではこの会談にずっと控え目な意義づけをし、何か将来の遠い交渉のための日程づくりのみを予定したほんの顔見せ程度の会談にすぎないという特徴づけをしていることを物語るわれわれのパートナーたちの声明が聞こえてきている。だが、ソ連と米国のような二つの国の指導者が初顔合わせをし、そのあとでジュネーブの湖やスイス・アルプスに見とれるためにのみジュネーブに出かけるなどとは、ぜいたくすぎる話ではなかろうか。国際情勢がこれほど緊迫している時に、これは許されないぜいたくであろう。

要するにわれわれは会談を真剣に準備し、会談がソ米関係の健全化に目に見える結果をもたらすよう全力を尽くすだろう。

R・ケイブ　今週ある雑誌にニクソン元大統領の論文が載った。彼は特に、軍備の制限または削減についての協定の達成は、同時に両国が政治的行動において相互に自制する合意がなければ平和の強化をもたらさないと書いている。要するにニクソンは、多分、いちばん肝心なのは軍備管理の問題ではなく、ソ米関係の潜在的緊張源だと考えているのだろう。これについてあなたはどういう態度をとられるか?

M・S・ゴルバチョフ　あなたのお話からニクソン氏の見解がわかって興味深かった。ジュネーブでレーガン大統領と話し合う具体的問題については、われわれは米国の国務省およびホワイトハウスと連絡をとって仕事をすすめている。この過程は継続中であり私は今の段階でこれに細かく立ち入ることはしたくない。

しかし、ニクソン氏の名前を聞いて私が連想するのは別の次元のことである。かつて、複雑な状況にもかかわらず、われわれはニクソン氏を首班とする米国政府との間で協力を組織する可能性と道を見いだすことができた。そして当時、非常に重要な諸決定が採択された。

六〇年代を思い出していただきたい。当時も国際情勢は容易ならざるものだった。しかし、一九六三年には今日まで効力を保っている非常に重要な条約——部分的核実験禁止条約が締結された。

これは歴史に属することである。しかし、歴史から教訓が引き出される場合、歴史も結構なものだ。現在もまた、責任ある国家的立場に立って状況を見つめ、情勢健全化とソ米関係修復へのアプローチを見つける必要がある。

H・グルンワルド　純粋に個人的な性質の質問をさせてほしい。あなたはソ連の新しいスタイルの指導の提唱者となっておられる。しばしば人々と会っておられ、一言で言えば人目にさらされている。こうした仕事のスタイルがお好きなのか、どんなメリットがあるのか?

M・S・ゴルバチョフ　まず第一に、こうしたスタイルをわれわれに教えたのはレーニンだ。レーニンはつねに、大衆のまっただなかで暮らし、彼らの言うことに耳を傾け、彼らの気分を理解し、彼らの希望を実際の政策に反映させなければならないと言っていた。だからこの場合、先べんをつけたのはレーニンなのだ。レーニンは一〇〇年に一度しか現れない不世出の人である。

第二に、これは私にとって新しいやり方ではない。スタブロポリ地方で働いていたときも、ここモスクワでも、今のポストに選出される前も同じようなスタイルで活動していた。それにわが国の多くの人々は、こういうふうに活動している。恐らくいま新聞が前よりも情報を公開するようになり、私の旅行や人々との会合をより広く報道しているからだろう。

そもそもわが国は、まさにこうした活動スタイルを必要としているのだ。われわれの前には問題が山積している。しかもそれらはかなり大きな問題である。それを解決する——新しいやり方で解決する必要がある。ここ数年の間にわれわれは、わが国の発展の現段階の分析を行った。われわれが到達した結論を勤労者に知らせ、人々の前で点検を受け、それから次の党大会に持ち出す必要がある。

従って問題は、こうした活動スタイルが私の気に入っているかどうかではなく、むしろ、もしわれわれが、われわれの策定した政策の実際の成果を得たいのならば、いまはこうした活動をするほかないということだ。

H・グルンワルド　もう一つ、個人的な質問がある。あなたはソビエト社会の非常に大きな変革のイニシアチブをとっておられる。その変革の過程で多くの責任者の更迭が行われ、これは今後も続くようである。あなたは人々から恐れられているのではないか?

M・S・ゴルバチョフ　恐れられてはいないと思う。いまわが国で行われていることは、わたし一人の思いつきではない。これはわが指導部全体の意見を反映したものだ。われわれは正

しい道を歩んでいると確認している。これらの問題の解決の機は熟しており、それらを解決しなければならない。国民と接触した結果到達する最も主要な結論は、われわれの提案や実際の措置が熱い支持を受けているということである。その上、党内にも国民の間にも、もっと迅速に行動してほしいというやむにやまれぬ要望が表れている。勇気と決断力、と同時に慎重さを発揮する必要があると思う。われわれは今後も、わが国民に対して高い責任感をもって行動する。一方、人々はわれわれが言行不一致のない確固たる政策を実施することを要求している。だからその意味でわれわれは厳しく監視されているわけだ。現在われわれが一段と公開性を推進して活動しているということは、われわれの民主主義をよりいっそう発揮しているということだ。したがって人々は恐れているどころか、逆にわれわれのやり方を歓迎しているのだ。

かといって、まるで私がすべてをバラ色に描き出そうとしているかのように思ってもらいたくはない。ソ連ではわれわれ全員に大きな改革を求める深いプロセスが進行中である。当然それは人々や幹部にかかわってくるし、全員の活動方法にかかわってくる。若干の幹部交替が行われていることは、わが国がある特別な状況下にあることを意味しない。これは当然のプロセスだ。悪いのはこのプロセスが滞るときだけだ。

従って問題は、若干の人事異動が、現在われわれが解決にあたっている諸問題をめぐる何らかの政治闘争の反映であるといったことではない。すべての人がいたる所で——われわれも、各共和国でも、州でも、各労働集団でも改革をしなければならないとわれわれは考えている。もちろんこれには党の大きな努力が必要だ。しかしわれわれがとっている路線は差し迫った要求を反映しているので、この路線はわが国民の断固とした支持を受けている。それはわれわれが正しい行動をとっているという確信をわれわれに与えている。

最後にこのインタビュー全体の要点と見ることができる一つの考えを述べたい。対外政策は国内政策の続きであると言われているが、その通りだ。とすれば、ひとつ考えていただきたいのだが、自分たちのためにこんな大規模な内政計画を立てているわれわれにとって、一体どんな外的条件が望ましいだろうか？　答えはあなたがたのために残しておこう。

H・グルンワルドは会見とインタビューに対してM・S・ゴルバチョフに心から感謝した。

（プラウダ、一九八五年9月2日号）

『今日のソ連邦』
一九八五年10月1日号付録
発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部
（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03—447—3536）
印刷・発行所　（株）新時代社
（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1—44・電話03—293—4881）